

【資料2】

平成25年度 武雄市立武内小学校 学校評価結果

1 学校教育目標
学校大すき・友だち大すき・ふるさと大すき 武内っ子

2 学校経営ビジョン
☆ めざす子ども像・・・(1)た:確かな学びを続ける子ども (2)け:健康でたくましい子ども (3)う:美しい心を育てる子ども (4)ち:チャレンジする子ども ☆ めざす教師像・・・(1)子どもを第一に考える明朗快活な教師 (2)研究に励み、資質の向上をめざす教師 (3)児童や保護者、地域の期待に応える教師 ☆ めざす学校像・・・(1)落ち着いて学習できる静かな学校 (2)いじめの無い、明るく楽しい学校 (3)あいさついっぱい元気な学校

3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
① 教職員総意の学校づくり ② 学びが分かる教育活動 ③ きめ細やかな連携	①三育成部が、学校教育目標の具現化に向け、積極的に活動できている。各専門部の連携も強化し、さらに教育効果を高めていく。 ②全体的に高評価であり、児童の基礎的学力が身につけてきている。ICT利活用教育の充実を図り、iPadを活かして、さらなる向上をめざしていく。 ③保護者との連携が密になり、ノーテレビデーの取り組みも成果を上げている。北中校区連携の生活リズム定着への取り組みをさらに進めていく。

5 総括表							
① 教職員総意の学校づくり							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	評価及びその理由	成果と課題
学校運営	学校経営方針	学校教育目標及び学校経営方針の周知	①教職員の周知徹底100%を目指す。 ②児童保護者の周知率90%以上を目指す。	①職員会議において、学校教育目標・校務分掌・学級経営・評価育成システム等の関係性を理解させる。 ②児童に対しては、全校朝会の場で説明を行う。保護者に対しては、学校便りで知らせるとともに、総会の場で説明し、周知度を高める。	A	①教職員が、学校教育目標及び学校経営方針を100%理解し、校務分掌や評価育成システム生かすことができている。 ②児童保護者へのアンケートにおいて、学校教育目標及び学校経営方針の周知率が90%以上である。	○教職員、児童保護者が一丸となって、学校教育目標達成を目指すことができた。 ●学校教育目標達成と評価育成システムとの関連を明確にする。
	教職員の資質向上	サービス規律の保持	信用失墜行為・交通事故・セクハラ・パワハラを防止する。	職員会議等の場で研修を重ねるとともに、長期休業期間中に研究の機会を設け、全職員で共通理解を図り、サービス規律違反0を継続する。	B	職員会議等で年3回以上研修・研究の機会を設けることができた。交通事故が1件あった。	○研修等により、サービス規律保持の意識が高まった。 ●交通事故に気をつける。
		評価育成システムの有効活用	自己目標の達成率90%以上を目指す。	自己目標申告書の作成、中間見直し等に教頭も積極的にに関わり、その目標達成のために相談体制をとり、指導助言を行う。	A	評価育成システムにおける自己目標の達成率が90%以上だった	○全職員が自己目標を達成することができた。 ●自己目標達成のために相談体制をとり、指導助言を行う。
	開かれた学校づくり	地域連携	①地域行事へ積極的に参加させる。 ②学校サポート制度の活用(各学年1回以上)をめざす。	①武内町大運動会及びふれあい祭りを学校教育課程の中に位置づけ、学習発表の場として活用する。 ②学校サポート制度の活用を念頭に置いて、各教科等の年間計画を作成し、実施する。	A	①児童保護者へのアンケートにおいて、地域行事(武内町大運動会及びふれあい祭り)へ積極的に参加した児童が99%以上だった。 ②学校サポート制度を各学年1回以上活用した。	○地域行事(武内町大運動会及びふれあい祭り)へ積極的に参加できている。 ●学校サポート制度の活用を念頭において各境教科の年間計画を作成する。
	危機管理	安全点検	遊具使用時における事故を防止する。	遊具にあわせた点検項目に沿って点検を毎月行い、全職員にその結果や対処方法を知らせる。また、児童の安全使用意識を高めさせる。	A	遊具の安全点検を毎月行った。児童保護者へのアンケートにおいて、遊具を安全に使用した児童が94%以上である。	○児童は、遊具を安全に使用することができた。 ●遊具の安全点検を毎月行い、安全を確保する。
危機対応		危機管理マニュアルの見直しと研修を行う。	危機管理マニュアルの見直しを行い、夏期休業中に研修の機会を設定し、職員に周知徹底を図る。	A	危機管理マニュアルの見直しした。PM2.5の対策も行うことができた。	○PM2.5の対策も行うことができた。 ●いじめ対策も含め、危機管理マニュアルを充実する。	

② 学びが分かる教育活動

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	評価及びその理由	成果と課題
授業力向上		校内研究推進	読解力向上をめざした国語科学習指導法を研究する。	読解読書領域において、書く活動と対話力、ICT機器の活用を通して、児童の読解力を高める国語科指導のあり方を実践的に検証する。	A	各学年1回研究授業を実施し、授業研究を深めることができた。	○教材研究や指導方法の検討、授業研究会を通して、指導法の研究を深めることができた。 ○活発な研究協議と講師の助言から指導法の研究を深めることができた。
		指導方法改善	データに基づいて課題の解決を図る。	学力向上対策委員会において、佐賀県学習状況調査、標準学力検査のデータ分析結果に基づく課題を把握し、定着度に課題のある内容については授業における重点指導項目とすることを推進する。	A	国語、算数の単元テストで、全体の8割以上がB基準に到達できた。	○学力向上対策委員会によるデータ分析結果から見られる課題に即し、授業や朝のスキルタイムで重点的に指導できた。
			個に応じた指導方法を工夫・改善する。	定期的にテスト結果を分析し、TT・少人数による個に応じたきめ細かな指導のポイントを把握する。	B	単元テストの平均は、どの学年も80点以上である。アンケートで授業が分かるが約70%である。単元テスト結果が全員7割以上に達していない。	○TTで、個に応じた指導を行うことができた。 ●全員が7割以上になるために、単元・内容によっては習熟度別指導など取り入れる。
●学力向上		基礎学力向上	言葉の特徴やきまり、漢字、計算力を身に付けた児童を育成する。	①言葉の特徴やきまり、漢字、計算力の定着に係る学習環境を整備する。 ②武雄市漢字・計算検定テストを実施し、結果を記録する。	B	単元テストの国語の言語事項、算数の技能の平均点はどの学年も80点以上である。漢字、計算検定の通過率は8割以上である。単元テスト結果が全員が8割以上に達していない。	○漢字検定や計算検定は合格できなかった児童に再度取り組みせ、合格させることができた。 ●全員の8割到達をめざし、すくすくチャレンジでの言語指導や計算ドリルの充実を図る。
			言語力・読解力を身に付けた児童を育成する。	「言語力向上年間指導計画」を基に、「身に付けさせたい力」と「学習用語」を系統的に指導する。	B	授業の中では、学習した「学習用語」を次の学習に生かそうとする姿が見られるようになった。アンケートで「日常で活用している」と答えた児童は8割に満たない。学習の場では活用できるが、日常の場で自主的に活用できる児童は個人差が大きい。	○集会での「はじめのことば」や「おわりのことば」、「インタビュー」など、対話活動を行うことができています。 ●日常生活の場でも活用できる対話スキルを指導する必要がある。
			伝統的な言語文化に親しむ児童を育成する。	論語、百人一首などの言語文化を体験する週間を全校一斉に実施する。	B	論語句間、百人一首週間を計画通り実施することができた。アンケート結果が百人一首を楽しんだ児童が7割で、9割に満たなかった。	●百人一首については、学校での練習時間の確保が十分でなく、句を覚えた児童が少なかつたため、楽しく感じた児童も少なかつたので、取り組みの期間を2週間に延長する。
		図書館教育	自から進んで読書に親しむ児童を育成する。	目標冊数の提示や図書館祭りの実施、家読の啓発を通して読書習慣を身に付けさせる。	B	ノーテレビデーの指導とともに、家読で図書指導を行った結果、家庭で読書をするようになった。ノーテレビの実施率は9割以上だった。各学年の目標冊数の8割程度を読んでいる児童が、一月末時点で5割程度だった。	○家読ノートの作成と、各学級の通信での取組の紹介が有効だった。 ●読書量については、「おすすめの本」の取組を全校で積極的に行う。
		学習習慣形成	学習・生活習慣を確立する。	学習・生活習慣形成について共通理解させ、「学習用具のきまり」を各学級に掲示したり、チェック週間を年3回(4月・9月・1月)設けたりする。	B	年3回チェック週間を設けることで児童に意識させ、定着に役立った。チェックカードによると、学習用具の準備はほとんどできているが、学習態度はまだ、十分でない。	●チェック週間だけでなく、常に声かけをすることで、もっと定着を図る必要がある。
●ICT利活用教育の推進	ICT機器を活用した指導力向上	ICTを活用した指導方法を工夫・改善する。	ICTを活用した指導方法を工夫・改善する。	ICTを活用した指導方法を工夫・改善する。	A	「電子黒板やiPadを利用した授業を、楽しくわかりやすい。」と感じる児童が8割をこえた。	○授業で使える内容を、職員研修で取り上げ、職員の指導法の改善を行った。
	ICT機器活用力の育成	ICT機器を活用して進んで学習する児童を育成する。	ICTスキルタイムを計画的に実施し、児童にiPadのスキルを身に付けさせ、授業で活用できるようにする。	ICTスキルタイムを計画的に実施し、児童にiPadのスキルを身に付けさせ、授業で活用できるようにする。	A	9割の児童が、iPadのスキルを身に付け、授業で活用することができている。	○ICTスキルタイムで、技能やアプリに触れ、学習に必要なスキルを身につけることができた。 ●今後は、家に持ち帰る機会も多いため、iPadを使う際のルールの指導を行う。

教育活動

●心の教育	特別活動	望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育成する。	①活動前に集会や活動のねらいを明確にし、めあてを持って活動できるようにする。 ②集会の終わりに、ねらいに即して活動できたかを振り返る時間を設ける。	A	約9割の児童が、集会の振り返りタイムで、めあてを達成できたと手をあげることができた。	○集会の始めにめあてを伝えたことで、めあてを意識して集会に参加することができていた。
			①児童が自主的に活動する時間を設定するとともに、活動ノートや振り返りカードを準備し、児童自らが話し合って計画、実行できるようにする。 ②年度初めに、提案カードの書き方を紹介し、年間を通して、書かれたカードの紹介を行い、自分達の課題として解決しようとする意識を高める。	B	委員会やクラブ活動の振り返りでは、約9割の児童が◎や○の自己評価をつけることができた。 2学期は、提案カードの紹介ができなかった。	○委員会やクラブ活動では、自主的に活動できるように時間と場を設定し、活動への満足感が得られている。 ●年間を通して提案カードの記入を促し、紹介することで、自分達の課題を解決しようとする意識を高めていきたい。
	勤労・奉仕活動	感謝の気持ちを持ちながら、学校及び地域の一員として勤労する喜びを感じさせ、自己有用感を育む。	学校をきれいにしようという意識を高めさせるために、年6回のクリーンタイムを実施する。	A	9割以上の児童が時間いっぱい、一生懸命活動することができたとふり返っていた。	○上級生が下級生のお手本となるように取り組む姿も見られた。 ○ボランティア担当の4年生が準備や後片付けをしてくれ、スムーズに活動に入ることができた。
	縦割り班活動	異学年交流において互いを思いやる気持ちを持って、活動に楽しく協力する態度を育成する。	共遊で、計画表、振り返りカードを作り、めあてに沿って活動させ、振り返りも行う。	A	9割以上の児童が異学年で仲良く活動するというめあてを達成することができたとふり返っていた。	○上級生が下級生に優しく教えたり、接したりする姿が見られた。
	人権・同和教育	すべての児童が思いやりと信頼にもとづく人間関係の下に学校生活が送れるようにする。	「ハートの木」を作り、年間を通して友だちのよさや頑張りをカードに書かせ、認め合う活動を行う。	A	ハートいっぱい週間に、一人1枚以上のカードを書くことができた。	○ハートいっぱいの木を、低中高学年の廊下に設置したことで、友達のよさを目にする機会が増えた。
			各学級で、学活や道徳などの年間計画にエンカウンターを取り入れた授業を位置づける。	B	年に1～3回の実施はできたが、学期に1回の実施までは達しなかった。	○SCの協力を得て、全クラスが1回以上、エンカウンターを取り入れた授業を実施できた。 ●授業例の紹介や研修を行うことで、実施を促していきたい。
	特別支援教育	教師の特別支援教育のスキルアップを推進する。	学期に1回程度、特別支援教育に関する研修を実施する。	A	夏期休業中に3校合同で研修会を開いたり、4回うれしの特別支援学校の巡回相談を実施したりして、特別支援的な視点で児童を見たり、意識したりすることができた。	○支援会議を数回開くことができ、個に応じた支援や手だてについて話し合い、日常の活動の中で取り入れることができた。
		個別の指導支援計画の作成と支援を推進する。	①個別の支援指導計画を立てる時に参考となる研修会を設け定期的に目標が達成できたか振り返る時間を設定する。 ②個別の支援計画については修正を呼びかけ、指導に生かせるようにする。	A	前期と後期に個別の支援計画の作成・修正・ふり返りをする時間をとることで、指導の方向性や重点を意識して、児童と接することができた。また、次年度への引き継ぎの資料としても、役に立たせることができた。	●今後も個別の支援計画の作成・修正・ふり返りを行い、全ての子どもの困り感を支援する方向性や重点を意識して、児童と接していく。
	教育相談	きめ細やかな相談体制、SCや専門機関と連携しながら効果的な対応にあたる。	①教育相談週間を6月と11月に設定し、「がばいシート」を実施し、児童や学級の状態を把握する。 ②アンケートの結果をもとに教育相談を行い児童が相談しやすい環境を作る。	A	年間2回の教育相談週間を延長したことにおいて、個人の実態把握や悩み等を共有する機会を確保することができた。「がばいシート」は、各学級ごとに分析を行う時間を設定し、学級経営の参考にすることができた。	○「がばいシート」を利用した教育相談週間は、個々人の悩みを知り、児童の心のケアをするのに有効であった。 ●今後は、さらに個に応じた支援や指導を話し合う場を検討したりしていきたい。
		児童や担任、保護者間の教育相談の体制を設定し、効果的な対応にあたる。	①SCや専門機関との連携を図り、きめ細やかな相談体制をつくる。 ②教育相談に関するスキルアップを図るために、SCや専門機関による職員研修を行う。	A	SCによる児童の見方や心理的アプローチ等の教育相談の研修内容を、児童の支援や指導の中で生かすことができた。支援会議や保護者、SCとの連携により、一貫した指導や支援を行うことができた。	○今年度は、教育相談に関するスキルアップを図るために、SCや専門機関による職員研修を行うことができた。 ●今後もSCや専門機関との連携を図り、きめ細やかな相談体制をつくっていく。
体育的活動	体力の向上を図る体育的活動と運動旬間を充実させる。	学校内外の体育的活動毎に児童の体力向上の意義を明確にし、計画的に実施していく。	A	それぞれの体育的行事において各自が目標をもって活動することができた。 相撲大会、陸上記録会、町民運動会において最後まで意欲的に活動することができた。	○体育的行事に積極的に参加し、楽しく活動で来ていた。 ●今後も意欲的に活動できるよう継続して指導していく。	
		寒さに負けない体づくりのために、マラソン旬間や縄跳び旬間を計画的に実施していく。	A	縄跳び旬間は縦割り班を中心に低学年から高学年まで楽しさを感じながら運動に取り組むことができた。学年間の交流、協力ができてよかった。 マラソン旬間は2月の寒さ厳しい中でも元気に運動場を走り回り、体力の向上に取り組むことができていた。	○縄跳びやマラソンへの良い意欲付けとなった。 ●来年度も実施し、継続して指導していく。	



6 総合評価

学校教育目標の具現化に向け、教職員総意のもと、保護者・地域とも連携できている。危機管理や服務規律への意識高揚もなされたが、交通事故が1件あった。授業力向上、ICT機器を活用しての指導の方法の工夫・改善はできている。児童の学力や言語力・読書への意欲については、向上の余地を残している。特別活動や特別支援、教育相談等は、充実している。各学級での人間関係作りの授業を計画的に実施し、全ての児童に思いやりの心を育てる必要がある。体育的活動・食育指導、交通指導は、よくできていた。保健指導については、手洗いの習慣化、早寝・早起き・朝ごはんができていない児童がいる。

7 来年度の改善策

職員会議の度に、服務規律保持に関する研修を行い、職員の意識を高め、「ゆとりを持った運転」「バックで駐車」を実践し、交通事故0を目指す。学力向上対策委員会や校内研究の充実を図り、わかる授業の工夫や言語環境の整備、朝の時間の学力向上に向けての時間設定や家庭学習の工夫を行い、学力向上・言語力向上を目指す。SCの協力と研修の充実により、各学級、学期に1回以上のエンカウンター授業を実践し、児童に思いやりの心を育てよりよい人間関係作りを目指す。毎月の全校朝会や長期休業前の集会等を利用し、養護教諭が、手洗いや早寝早起き朝ごはんの大切さを話すことで、よりよい生活習慣の定着を目指す。

●は共通評価項目、○は独自評価項目